

一九八七年一二月八日に始まった被占領地におけるパレスチナ・アラブ人民の蜂起は、すでに六〇日を超えた。人民蜂起は、シオニストの占領政策を破綻させたにとどまらず、米帝、アラブ反動をもゆるがせていく。

このパレスチナ・アラブ人民の蜂起の断固とした前進は、まさに、八年が人民の時代の幕あけであることを示している。

一八八年は、人民の時代の幕あけ

八八年の中東情勢は、パレスチナ・アラブ人民の蜂起、イラン人民の非妥協な米帝との対峙を一方に、他方、米帝のシオニスト・アラブ反動の統合支配の意図の破産に、人民がイニシアチブを握っていることを明瞭に示している。

パレスチナ・アラブ人民の蜂起（インティファーダ）の切り拓いた地平

まらず、八七年初頭のICO（イスラム諸国会議）サミット、そして一月に開かれたアラブ連盟のアンマン・サミットに象徴されるガルフ戦争の問題を軸に、エジプトのムバラク政権のアラブ復帰を行い、パレスチナ問題をアラブ民族の第一の大義としての位置からひきずりおろし、投降主義への道を雪崩をうつて進もうとしたアラブ反動の意図をつぶした。さらに、シオニストの戦略的同盟者である米帝とアラブ反動の結託による抑圧政策を破綻させたにとど

人民の時代告げる八八年の始動

一九八八年二月一〇日



第32号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL. (03) 291-5533
編集 J. R. A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費20000円

目次

人民の時代告げる88年の始動	1
日本赤軍声明（資料①）	6
PFLP創立20周年にあたってのハバシ議長インタビュー	
その1（資料②）	7
西岸の人種キャンペーン（資料③）	10
激動の中東ドキュメント（1988年1月7日～2月7日）	11

補完しあう帝国主義の世界支配維持は、ますます、平和と幸福を求める人民の意志、民族解放と民主主義を求める人民の意志と対立することになるだろう。

八八年は、米国大統領選をはじめとして、敵の政治過程自身も矛盾と混乱に満ちたものになる。二一世紀を人民の時代としていくために、八年は決定的な時代であるとともに、人民自身の闘いが強化される諸要素が整っている。

二 パレスチナ人民蜂起と米帝・アラブ反動

二月七日で被占領地におけるパレスチナ・アラブ人民の蜂起は六〇日を迎えた。そして、シオニストの虐殺、拷問、逮捕、追放といった攻撃にもひるまず、人民はいつそう怒りを燃やし、蜂起は続けられている。ベイテームでは、極右シオニストのセツラーが少年を射殺している。つづく一三日には、シオニストは国际世論を無視し、ガザ、西岸で逮捕した人民の指導者九名のうち四名を南レバノンへと追放した。この四

こうして、八七年の中東政治の反動化が進む中で、人民の闘いは、それが破綻させていった。そして、それは、どもなおさず、米帝の中東政策の破綻をもたらしたということである。

この闘いは、アジアにおける韓国人民の民主化の闘い、フィリピン人民の反米民族解放民主革命、そして、ラテン・アメリカ人民の闘い、アフリカ人民の闘いと、一体のものとして八八年の世界情勢を、人民の闘いが主導となる時代として切り拓いている。これは、二一世紀にむけた国家政治レベルでの世界的再編過程の矛盾が、人民レベルにまで深まることを背景としている。この再編過程は、帝國主義諸国と社会主義諸国・反帝進歩的諸国が二一世紀へと生きぬくための闘争として、政治・軍事・

経済・社会のすべての面において貫かれてきた。その世界的階級闘争の主導性が国家対国家の闘争にあった。一方において、一二月のソ米首脳会議での歴史的なINF条約の締結に示される社会主義諸国、反帝進歩国家の和平ニシアチブが、世界各地での緊張緩和政策を行なせ、国内経済再建設を進めていた点にある。これに対し、米帝の再編過程は、中東での威信回復をかけたガルフ戦争への介入、ニカラグア、アフガニスタン等での反革命勢力への政治的・軍事的支援に示されるような軍事冒險主義による帝国主義支配の維持・回復と、帝国主義間の経済矛盾の激化として、それが、世界的にみたとき、一方での緊張緩和の進展と、他方における戦争の「L I W」形態として、地下戦争・局地戦が激化する条件となっていた。

帝国主義の二一世紀への延命の道は、一〇月の「ブラック・マンデー」の株大暴落、日米経済矛盾の頂点化に示されるように、米帝の経済的没落と、米帝がそれをおし止めようとして、他の帝国主義へ矛盾を転嫁していくことによって帝國主義間矛盾の激化となつてあらわれている。それゆえ、帝国主義本国内人民は、自国の独占資本と米帝に対する闘いを強め、第三世界人民は、反米民族解放闘争をますます強めざるをえない条件が煮つまっている。

これまでの石油確保を軸にした米帝の中東政策の破綻と、アラブ反動の投降主義へのなだれこみの阻止であった。そのあらわれが、中東においては、米帝の中東政策の破綻と、アラブ反動の投降主義へのなだれこみの阻止であった。こうした八八年の情勢の中で、最も危険なのが、日本帝国主義である。日本帝国主義は、経済面では米帝をしのぐ勢いにあり、米帝との間で半島問題での経済制裁を頂点とする帝國主義が先鋭化した状態にあり、米帝を動搖させていくことになる。

これは、また、丸岡同志不当逮捕、K C I Aの大陰謀である大韓航空機行方不明事件を口実とした極東の反日韓米反革命同盟強化と一体のものであった。

こうした八八年の情勢の中で、最も危険なのが、日本帝国主義である。

日本帝国主義は、経済面では米帝をしのぐ勢いにあり、米帝との間で半島問題での経済制裁を頂点とする帝國主義が先鋭化した状態にあり、米帝を動搖させていくことになる。

これが、日本の力を弱めるための圧力を強めている。これに対して、日帝は、自己権益防衛のために、軍事・外交

面においては、米帝の世界支配の破綻を補完することによって、かわし

て、世界人民の直接の敵として、世界

各地で登場することを意味している。

実際、中東においても、日帝は、ガルフ戦争への軍事介入への間接支

援、また、米帝が自らの経済破綻から

ガルフ戦争への軍事介入への間接支

援、また、米帝が自らの絏済破綻から

ガルフ戦争への軍事介入への間接支

の話し合いの拒否の立場から、独自に被占領地人民の闘いを支援している。「ラジオ・アル・コット」も総司令部派が放送していると言われている。

左派、民族派に共通している認識は、被占領地パレスチナ人民の闘いが在外のPLOそして民族派の指導部を越えて進んでいるということであり、在外の指導部のあり方を問うものになっているということで、アラファト派の「亡命政権構想」は、在外の指導部が自らの位置を保持しようとする意図から出されていると批判している。

反帝進歩国家としてのシリアは、明確に米案を拒否し、反シオニストの戦線の強化をとおしてシリアの位置を強めようとしている。

現在左派民族派の指導に問われていることは、人民の蜂起を発展させることと同時に、米帝・アラブ反動派の民族自決の要求を消し去ろうと意図しているのに対して、どのように対応するのか、さらに、被占領地人民の闘いとイスラエル人ないしは非シオニストユダヤ人との共同をど

う強化していくのかということである。
いずれにせよ、パレスチナ・アラブ人民の蜂起展開は、「自治」か民族自決か、個別交渉か包括的和平交渉かという問題として煮つまっていることは必至である。

三 ガルフ戦争の現局面

う強化していくのかということとある。
いずれにせよ、パレスチナ・アラブ人民の蜂起展開は、「自治」か民族自決か、個別交渉か包括的和平交渉かという問題として煮つまっていることは必至である。

分たちであることを知っている。さらに、米帝自身がイラン・コントラ事件で暴露されたように、イランと秘密で取引きしていたことなどから米帝への不信はぬぐいがたいものとしてあつた。

さらに、一月のアンマン・サミットで、これらの諸国はエジプトを実質的にアラブに復帰させ、その軍事力を頼みとしようとしたが、パレスチナ・アラブ人民の蜂起の爆発はキャンプ・デービッド路線を維持しイスラエルとの関係を維持しているエジプトから援助を受けることを、これらの諸国に躊躇させるものにした。オマーンをのぞいて、エジプトからのおもな提供を受け入れている国はなく、結局イランとの話し合いに進まざるをえない状況におかれている。

この背景にあるのは、プラック・マンデーの直接のきっかけが米駆逐艦のイラン石油基地砲撃であったことに明確に示されているように、米帝の財政赤字である。米帝は、経済危機の爆発をおしとどめるために、その軍拡政策によつて肥大した財政赤字の削減を米国内、同盟諸国からつきつけられており、一カ月に二〇〇〇万ドルの費用のかかるガルフへの介入を再考せざるをえなくなつた

のである。この米帝の失策のつけを、もともと米帝の介入を望んでいなかつたG C Cの多くの国に支払わせようというのであるから、ますます、米帝の信頼は失われていくことになつてゐる。

こうした状況の中で、イラクは完全に孤立している。アンマン・サミットでのイラクへの支援の確認が、G C Cをしてイランとの話し合いへと流れていたため、アラブ反動・米帝の力を引き入れることによつて、軍事的劣勢を挽回しようというイラクの意図はみごとにうちくだかれた。逆に、アンマン・サミットで孤立したようにみえたシリアの位置が、イランとアラブ反動の和解を進める中で高まつた。

親米国サウジが、外相であるファイサル王子を、国交のないソ連に派遣したことは象徴的である。これについて、サウジは、国連の常任安保理事国に国連でのイラン制裁を決議させるためと表明しているが、明確なのは、イランが依然として戦争責任問題でゆづらず、国連での制裁決議によつても、ほとんど何も変わらないということである。

結局、ガルフの安定を求めるG C諸国は、イランを変えるのではな

シオニストはセツルメントの増設を凍結する、というもの。その意図が何よりも蜂起を止めさせることにあることは明確である。

パレスチナ・アラブ人民の蜂起が続き、シオニスト占領軍の蛮行が繰り返され、アラブ反動も個別和平交渉への口実を失い、アラブ・イスラエルの統合支配という米帝の中東戦略はいきづまり、イスラエルの戦略的同盟者である米帝自身の中東での影響力を失うことになる。

そこで、レーガンは、二月に入つて、マーフィー中東局長をシリア、ヨルダン、サウジ、イスラエルと歴訪させ、「新和平案」によって收拾しようとした。その中身として暴露されているのは、第一に、一五〇万の被占領地のパレスチナ人に限定的自治を暫定的に与える。第二に、イスラエル、パレスチナ人代表、ヨルダン、エジプトは一年以内に最終的解決方法について、交渉に入る、というもの。ここで明確なのは、自冶問題として、パレスチナ民族自決権を否定していること。そして PLO 抜きの個別交渉による、という従来のキャンプ・デービッド路線でしかないということ。これはパレスチナ・アラブ人民にとって受け入れること

のできないものであるのは当然のこととして、右翼シオニストのシャミルからも受け入れを拒否されている。パレスチナ・アラブ人民の蜂起はシオニストの占領政策を破綻させるのみならず、ユダヤ人の間に占領政策に反対する声を強め、矛盾を生み出している。シオニストの占領政策に反対するイスラエルユダヤ人の平和運動「ピース・ナウ」は、一月二三日五万人のデモを組織し、昨年来の数千人のデモの一〇倍の動員に成功している。また、労働党の唯一一人のアラブ人議員は、シオニストの政策に反対して、脱党し、労働党へのイスラエル内アラブ人の支持は失われることになった。

の規定（五ヵ年間、外交・国防問題を
以外の自治を行い、遅くとも三年後
から、最終解決案について交渉を始
める）を基礎にし、その五年間ヨル
ダン警察が西岸、ガザの治安維持を
担当し、土地所有権、水資源問題を
ヨルダンとイスラエルが討議すると
いうものである。この案の際立った
特徴は、被占領地の併合の中での「自
治」であり、五年の期間をおくること
によって、「自治」を名目に、併合
をすすめるという意図が明確である。
実際に、シオニストは、占領してい
るシリヤ領ゴラン高原を併合してき
た。シャミルは、これまであからさまに、西岸、ガザを返還しない立場
を表明してきたし、シャミル案のど
こにも、シオニストの入植、すなわち
パレスチナ・アラブ人からの土地
の収奪をやめるという言葉はみられ
ない。最終解決を即話し合うのでな
く、先に引き伸ばすのは、実質的な
併合をすすめるためである。したが
つて、この「自治」案は、アラブ反
動ですら受け入れがたいものである
このシャミルの立場は、アラブ・イ
スラエルの統合支配を狙う米帝の中
東政策を困難におとしいれ、アラブ
反動の手に土地を取りもどすという
アラブ反動の夢を台無しにしてきた

今年一〇月のイスラエル選挙を前にして、米帝・労働党とシャミルの矛盾はいっそう拡大することになるだろう。

しかしながら、米帝・アラブ反動・シオニストに共通しているのは、パレスチナ人民の民族自決権の否定であり、パレスチナ問題を「自治」問題として収束させようとしていることである。違ひとしてあるのは、シオニストの支配下での「自治」なのか、アラブ反動の支配下の「自治」なのかにすぎない。

PLOをはじめとするパレスチナ人民は、民族自決権を否定したこれらの和平案を拒否する立場に立っている。

アラファト派・民主戦線は、こうした動きの中で、「亡命政権構想」を再び持ち出し、独立国家として和平交渉に参加しうる立場を作ろうと意図している。また、人民戦線などのPLO内左派は、今なすべきことは、被占領地人民の闘いを支援、發展させていくことであるとし、「亡命政権構想」は時期尚早と反対している。

さらに、人民戦線やPLOに統一されていない総司令部派などの民族派は、あくまで全土解放、いっさい

なかつた。PFLPは、結成宣言を発したとき、最大限可能な限りのパレスチナの闘争組織を網羅していたし、統一戦線の中で、ファタハと共に活動することを目的としていた。これは一九六八年のことである。

最初は、我々は、PFLPと呼ばれる党の建設は計画していなかった。ファタハの拒否、PLFや幾人かの無党派の人々の離脱のために幅広な民族戦線形成の目標が達成できず、PFLPを労働者階級の党へと転化させ、PLOを広範な人民の枠組としていく考えを進めていくこととなつた。

シオニストのイデオロギー、実践帝国主義との同盟関係等をみたとき、パレスチナ解放は長い困難な過程を経るだろうと、我々は予測した。

② PFLP創設に至るまでのパレスチナ民族レベルとアラブ民族レベルの関係

ANMパレスチナ支部としての我々は、六四年戦死したカリド・アブル・アイシャ烈士のように、六四年から武装闘争と人民戦争を考えてきた。我々は、パレスチナ解放の唯一の方法として武装闘争の必要性を深く信じていた。同時に、我々は、ナセル主義指導部との協同の必要をも考

えていた。我々は、パレスチナの活動と、ナセルのエジプトを代表とするアラブ民族解放運動との結合なしには敵陣営と全面的対峙を考えることはできなかつた。武装闘争開始を準備したが、同時に、我々は、ナセルのエジプトとは共同する問題であると理解していた。

六四年初頭にナセルと会つたときは、パレスチナの武装闘争の開始が必要であるという提案を行つた。これについて彼は、「イスラエル」の問題は、多くの人々が考えるよりも複雑である。これまで何度も言つてきたように、『イスラエル』に対する戦闘は、同時に、米帝に対する闘いがあるので、私は、パレスチナ解放の者は持つていいないと言った。そして、ナセルとの討議の末、我々は、武装闘争準備の推進を許すという合意に達した。我々にとってこれは、訓練、偵察、武器移送等の開始を意味していた。

③この二〇年間の発展段階の評価について

第一段階については、すでに①で述べた。第二段階は、PFLP—G Cへと改組していくことになるPFLPの離脱から始まつた。この離脱の結果、PFLPは、ANMパレスチ

還の英雄は、A N Mを母体とする組織であったためである。その結果として、P F L Pをどうするかということである。なぜP F L Pという名を残したか？我々は、最初の年に政治的・軍事的闘争の大きな記録の蓄積に成功していたし、それが人民の信頼を得ていた。この記録を保持したいと考える反面、我々は、自らが革命の一組織であることも理解していた。

大きな問題は、我々の組織の政治的・思想的・社会的性格は何かといふことであった。A N Mパレスチナ支部の経験した発展の中から、我々は、自らをパレスチナ労働者階級の組織であると考えた。

第三段階は、A N Mパレスチナ支部指導部の内部論争に示されている。この論争には二つの見解があった。第一の見解は、P F L Pは、パレスチナ労働者階級を代表する左翼、マルクス・レーニン主義党へ転化できるというものであった。第二の見解は、それは不可能であり、プチブル

の党へは転化できないというもので、一九八一年四月、第四回大会で、我々は、転化過程の達成を確認し、PFLPの組織的構造を再検討した。そして、民主中央集権制に基づく規約の採択を行った。この過程は、非常に困難な過程であり、一九七九年我々は、この段階を成功裡に通過したことを確認した。

一九七二年三月の第三回大会では、ニン主義党ではないとしていた。この段階は、この第二の見解のグループが一九六九年二月に分裂し、DFPがPFLPを形成したことによつて終わつた。もちろん、これだけが分裂を生む矛盾した点ではなかつたし、多くの政治的・組織的相違があつた。

第四段階は、PFLPのマルクス・レーニン主義党への転化の段階であった。一九六九年二月の第二回大會で、「パレスチナ解放の戦略」を発表し、PFLPの展望と、将来の組織的形態を規定した。一九六九年から一九七二年二月の間、PFLP指導部は、その政治的立場、スローガンを通して、左翼的性格を具体化するために活動した。

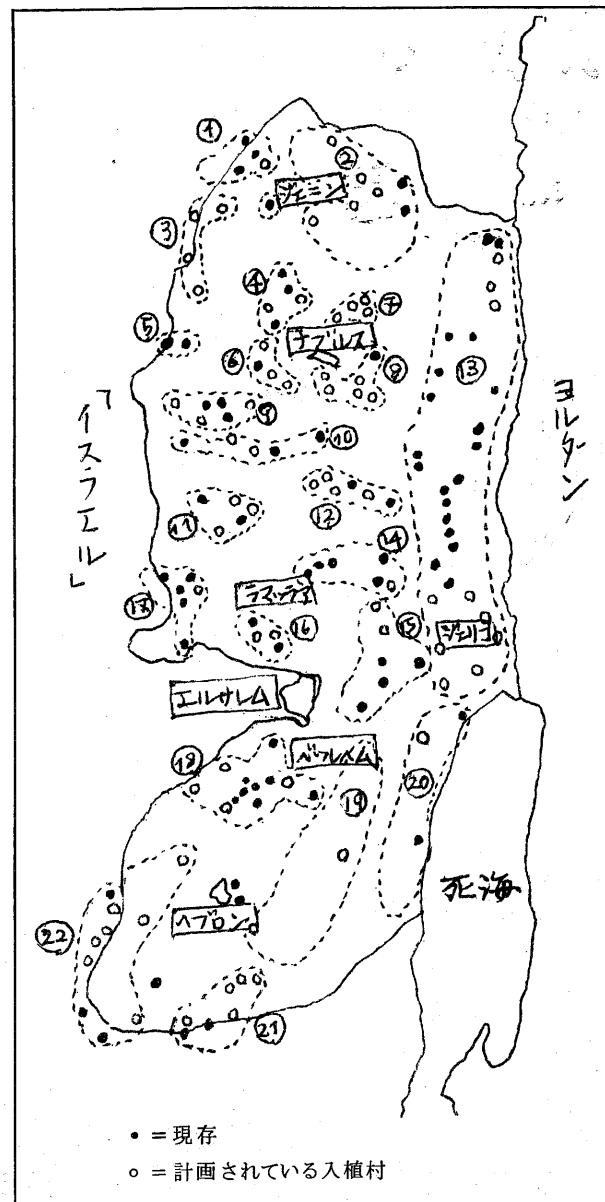
国際両レベルにおいて、パレスチナ問題を不斷に前面におし出していかねばならない。また、イスラエル人に対するは、正義の民族的諸権利を持つパレスチナ人民が存在するといふことを受け入れさせることである。「イスラエル」が不敗であると信じさせることによって我々の側に心理的変化を作り出そうとしているのが、「イスラエル」なのだが、我々は、少なくとも、この敵に對して、パレスチナ人民が存在しており、無視することはできないということを知らせるべきである。パレスチナ人民の権利は、認められてしかるべきだったのだ。敵が占領によつて得るものよりも、占領によつて負担をよりこうむるよう、あらゆる可能な努力を注ぐべきである。そして、正にそのとき、正義の民族的諸権利の回復のために我々は前進しているのである。

である。
②被占領地内でのイスラム原理主義潮流について
被占領祖国内外でこの潮流が勢力拡大しているとする評価に同意する。これは、パレスチナに限った現象ではない。
この潮流が成長した理由は、社会・経済的解放過程で直面する諸問題と諸困難、労働者階級の弱さにある。ナセル時代には、この潮流は急成長できなかつた。大衆は、ナセルの指導が自分たちの熱望を実現し、社会的・経済的解放を実現するものとみていたからである。しかし、指導が失敗したとき、大衆は、他の潮流を求める。
加えて、イラン革命の勝利が要因としてある。また、別の要素としては、帝国主義とアラブ反動が自己の利益に役立つように、原理主義勢力を奨励しているということもある。
しかし、イスラミック・ジハードは、これらの反動勢力とは一線を画している。他のイスラム勢力が、パレスチナの民族主義的・進歩的勢力に敵対していたのに對し、イスラミック・ジハードは、敵シオニストに対する活動に集中しているからであ

二 PFLPの創立と、その10年 年の発展について

②人民戰線

うな新しい基本行動を開始する決定を下した。四八年から六七年までの間軽視されてきたパレスチナ人の役割を回復するために、パレスチナの前衛的諸勢力を代表する民族戦線の創設を考えることは、自然なことだつた。



● = 現存
○ = 計画されている入植村

毎日、「入植」村の日雇いか、エルサレムのダマスカス門を通って、四年ラインへ日雇いに行かざるをえない。四年ラインでの労働には、その争議権も社会保障もない。しかも、イスラエルの経済破綻のしわよせをとくに青年層の今回の蜂起を準備したこととは、明確である。

こうした条件が、パレスチナ人民、さらに、リクード政権が七七年に誕生してから、このイスラエルによる

入植キャンペーンが悪質になつたことを考えねばならない。「入植」の組織化、計画は世界ユダヤ機構が担当しており、イスラエル国家は、その実行者という形態をとっているが、ガザへの入植で解消してきたのである。欧米系ユダヤ人と東方系ユダヤ人の差別構造を、「安い住宅」「公共サービスの完備した新しい町、新しい村作り」をえさに、領土拡張のバネにしてきた。そして、八二年四

- カダフィ大佐提案をうけ、アラブ連盟は、三週間以内に被占領地の「爆発的状況」を討議するための緊急閣僚会議を開催することを決定。
- PLO中央評議会、バグダッドでスタート。パレスチナ亡命政府構想は議題化されていないとの報道。シリアルがそれをおし止めていると語る。イラン・サウジの交渉が準備されているとの情報。
- 米国防長官、サウジ入り。
- アラブ外交筋は、対イラク大攻勢をイランがかけようとしているが、シリアルがそれをおし止めていると語る。
- ガルフ戦争

激動の中東 ドキュメント

一九八八年一月七日～二月七日

将来の任務として、指導部と幹部の理論知識の強化によって転化過程をしめくくることをめざした。これらは、戦線をマルクス・レーニン主義党へ転化させるための諸段階としてあつた。

(4) DFLPの分裂
第一に、六八年のPLFの離脱と、六九年のDFLP(パレスチナ解放民主戦線)の離脱を区別しよう。前者は、幾つかの組織のパートナー・シップの終了である。後者は、これは本部の分裂であった。一九七二年に、PFLPは、パレスチナ解放人民革命戦線の分裂に直面したが、このグループの規模から、また、政治・理論・思想的な面からも、重要性が少なかつた。

PFLPは、分裂問題の再検討を継続的に行ってきた。過去において、我々は、分裂したグループにすべての分裂の責任を帰し、非難してきた。しかし、転換過程の前進の中で、この問題に対する分析の仕方を我々は変えた。第四回大会の組織報告では、分裂したグループが主要責任を負っているということに加え、当時のPFLPの指導母体の内部事情が

分裂に対する部分的責任を負うているとしている。当時の試練の指導部の状況から考へて、分裂をくい止めることができたとは思わないが、状況が違つていなら、それを小さくしたり、分裂まで至らないようにはできただろうと信じている。

(5) 転化－転化過程はどこまで到達したか
来たる第五回大会では、大きな問題を取り組まなければならぬ。それは、転化過程は完了したのか、転化をかちとるためにまだ時間が必要なのか、を規定することである。個人的な考えでは、PFLPは、転化過程を終了した、ないしは終了に間近いと思う。

その基準は、レーニン主義にのつて、転化の終了過程は、二つの主要な任務を提起している。その第一は、パレスチナの革命的民主諸勢力との諸関係を強固にすることであり、我当しております、イスラエル党建設のためのパレスチナ左翼の統一の

- ①ライハン
- ②北サマリア
- ③西サマリア
- ④シャベイ・シャムロン
- ⑤サリト
- ⑥ケドミム
- ⑦ティルツア
- ⑧エロン・モレ
- ⑨カルネイ・シャムロン
- ⑩アドウミニ
- ⑪ハラミシユ
- ⑫シロ
- ⑬ヨルダンけい谷
- ⑭ベイト・エル
- ⑮マアレ・アドウミニ
- ⑯ギボン
- ⑰モディム
- ⑱グーシェ・エツイオン
- ⑲ジュディア砂漠
- ⑳死海北部
- ㉑ヤーティル
- ㉒ヘブロン山地

必争である。第一の戦線は、PLOの政治路線が、帝国主義とシオニズムに反対し、修正主義と対峙する解放的性格を堅持していくように、これを強化することである。第二は、PLOの機構において、民主的諸原則が掲げられるようになることである。(三三号へ続く)

この図(11ページ)は、歐州のあらがったもの。図でみてとれるよう西岸の土地の半分は、イスラエルが占領して、「入植」している。コ時代の土地登記を橋にとる、「軍管区」指定してただで取り上げる、土地奪取の手口は、オスマン・トルコ時代の土地登記を橋にとる、「軍管区」指定してただで取り上げる、金を積んで買ひとる等々。

西岸の人民は、占領当局から、市場産業振興を阻止され、割高のイスラエル製品を買わされ、イスラエル国民の数倍の税金をしばりとられ、(ガザでは、八六年度のある調査では、イスラエル国民の一〇倍とのこと)「地方交付税」もしばしば凍結された生活を二〇年送ってきた。西岸最大の事業も五〇〇人のパレスチナ人を雇用しているのみである。

さらに劣悪なのは、キャンプ人民である。外国に出稼ぎに行った家族からの仕送り、UNRWAの援助で、糊口をしのぐ生活を強いられてきた。

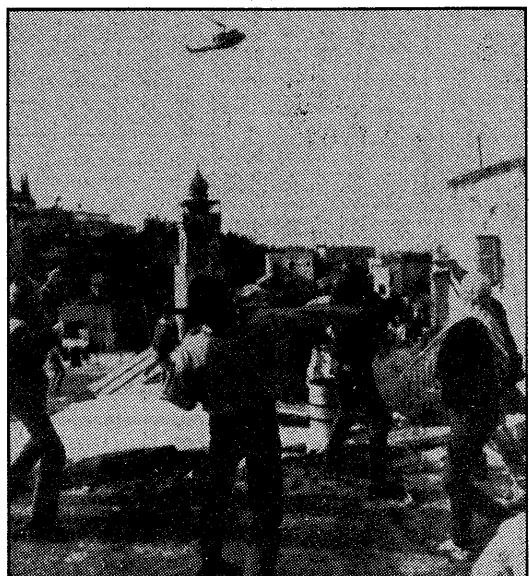
- サウジの新聞は、イラン—GCC会談が、外相レベルでダマスカスで行われようとした。
- 一月八日（金）
被占領地パレスチナ人民の蜂起（二月めに入った）
 - ガザのブレイジ・キャンプで、モスクの礼拝から帰る途中のデモ、イスラエル軍との衝突で、青年一名が射殺され、数名が負傷。
 - ガザのムガジ・キャンプで昨日射たれて負傷していた兄弟二人（兄は二〇歳、弟は十五歳）が死んだ。
 - ガザのラファでは、デモ隊の頭上に、イスラエル軍がヘリコプターで催涙ガス散布。
 - 国連副総長ゴールディング氏、一月二〇日までに被占領地パレスチナ人民の安全を計る方法提案にむけ、本日から六七年ラインで現場調査。国連特使の来訪だが、イスラエル政府からは、公式出むかえなし。
 - 本日から、「不服従運動」がスタート。学校、商店等、すべてストップ。イスラエル、ガザ全体を封鎖。外国人記者も立ち入れない。ガザのキャンプ入口には、戦車を出動させているとするパレスチナ側の報

- 一月九日（土）
被占領地パレスチナ人民の蜂起
 - ガザで三人が殺され、数十人が銃撃されて負傷。ガザのシファ病院のうけつけ記録では、三十九人が銃撃による負傷で入院したとなっている。シファ病院側は、収容能力がなくなったので、救急治療だけ施して帰つてもらっていると発表。
 - 殺された三人のうちの一人は、カーン・ユニス・キャンプの妊娠中の婦人。イスラエル軍がうちこんだガスで窒息死した。
 - ラビン国防相、ヘリコプターでガザの鎮圧状況視察。
 - イスラエル、外国人記者団に、ガザ入りは許可したが、キャンプの中には入らせない。
 - カーン・ユニス・キャンプ近くの村は、昨夜イスラエル軍の夜襲をうけた。村人のうち全男性を狩り出し、十数人を軍本部へ連行し、拷問した。

- 一月一〇日（日）
被占領地パレスチナ人民の蜂起
 - ガザの全キャンプは封鎖され、装甲車のイスラエル軍パトロールが走り回る。ブレイジ・キャンプの入口では、パレスチナ人青少年が後手にしばり上げられ、ひざまずかされた上に、警棒で頭をなぐられた。
 - イスラエル軍ヘリが、キャンプ上方を旋回し、催涙弾をキャンプにうちこんだ。カーン・ユニス・キャンプ等では、こうした厳戒体制下ですら、青少年がバリケードを作り、投石して、イスラエル軍と市街戦を続けた。六歳の少年まで、この闘いに参加しているとの報告がある。

- 一月一一日（月）
ガルフ戦争
 - エジプトのムバラク大統領、本日から約一ヶ月間のガルフ歴訪。サウジアラビアから、イランへ停戦を
 - パレスチナ人民の蜂起
 - ガザのカーン・ユニスで、パレスチナ人青年一名が射殺された。一

アッサフィール紙より



2月1日 西岸ナブルス市で、上空旋回するイスラエルのヘリコプターがけて、パチンコをうつ青年たち



2月4日 デモ隊の投げた石を顔に受け、あわてるイスラエル兵士（ロイター）



2月2日 西岸のラマッラで、イスラエル軍に投石する少年

2月9日 カランディア近くで、パレスチナ旗を掲げつつ、イスラエル軍に投石する少年たち
パレスチナ旗には、アラブ・パレスチナと書いてある

- パレスチナ人民の蜂起

● イスラエル軍による銃撃、殴打で入院中のパレスチナ人は、三〇〇人以上とされる。

● 西岸ラマッタ近郊のアマリ・キャンプから一〇人がイスラエル軍に拉致され、殴打を受けた。全員、入院。

● ガザで、CBSカメラマンが軍に殴られた。イスラエルはCBSに謝罪。

● レバノン－シリヤ

● 西ベイルートで、西独系レバノン人技術者シユライ、誘拐された。

● ガルフ戦争

● 北部戦線、激戦。

● イラク、タンカー二隻を攻撃。

● ムバラク大統領、訪米。

● パレスチナ人民の蜂起

● 追放された四人、レバノンのサイダでムスタファ・サアド氏と会い、アイネ・ヘルワ・キャンプへ行つた。

● PLO、執行委員会のフーラニをヨルダンへ派遣し、討議。

● フセイン国王、米政策を批判。「昨年のソ米首脳会談時、米政府は、

- ・ ワシントンでやらせようとする圧力がけたが、拒否した」と暴露。
- ・ イスラエル内閣官房長官ルビン・ユタイン（リクード）、米から帰国。
- ・ ムバラク大統領—レーガン大統領会談（ワシントン）。ムバラク大統領の中東和平新プランを米は支持。
- 一月二九日（金）
パレスチナ人民の蜂起
- 西岸のラマッラー、ベツレヘムなどで、火炎瓶が投げられた。視察中のバーレフ警察相の車を攻撃した。
- イスラエルの心理学者五〇〇人が占領政策を批判。
- エルサレムのアル・アクサ・モスクの礼拝を、イスラエル軍一〇〇〇人、ヘリコプターで威圧。これに対し、礼拝後、パレスチナ人はパレスチナ旗を掲げて、デモ。数人が逮捕された。
- パレスチナ・ピース・ボートのアル・アウダ・キャンペーン（帰還）追放されたパレスチナ人一〇五人が乗りこみ、支援者含む四〇〇人がギリシャのピレウスからパレスチナへ行くという鬪争。

- ・ レーガン大統領、新中東和平プランを発表。
- ・ シャミル首相、「完全自治プラン」発表。ムバラク大統領の新プラン拒否。
- ・ ペレス外相政治顧問ノヴィク、ワシントンへ。訪米中のムバラク大統領と会談するみこみ。
- ・ A J C 次期会長リットン、モロッコ入り。
- レバノン一シリア
- ・ U N I F I L のレバノン駐留六ヶ月延長を国連安保理が決定。
- 一月三〇日（土）
- パレスチナ人民の蜂起
- ・ 西岸のナブルスで激突。パレスチナ人二名が射殺され、二〇名以上が負傷。ナブルス市に外出禁止令この激突で、イスラエル兵も負傷ガザでも衝突。
- ・ イスラエル、地下の蜂起指導部 I N L P U O T （被占領地人民蜂起統一民族指導部）の存在を認めるヨルダンのフセイン国王、米特使ハビブと会った。
- 一月三一日（日）
- パレスチナ人民の蜂起
- ・ 西岸のベツレヘム近くで、青少年たちが警察署を焼きうち。また、ラマッラ近くでは、入植者一名

- ・ シャミル首相、ヨルダン・パレスチナ合同代表と、キャンプ・デービッド合意の枠内で会う用意ありと語る。
- ・ フセイン国王、ローマへ。
- ・ ムバラク大統領、パリへ。
- ・ レバノン・シリアルー「S L A」と一時間の戦闘。
- ・ 南部で、レジスタンスがイスラエルー「S L A」と一時間の戦闘。
- ・ シャラ外相（シリヤ）、イランへ。
- ・ ラフサンジャニ国會議長、日本のNHKと特別会見。
- ガルフ戦争
- 二月一日（月）
パレスチナ人民の蜂起
- ・ 入植者が西岸のドヘイシャ・キンブ（ヘブロンとベツレヘムの中間に）に押し入り、一二歳以下の生徒三〇人を拉致して行つた。
- ・ 西岸のトルクラム近くのアナブタ村での衝突で、二名が射殺され、多数が負傷。
- ・ イスラエル軍、ナブルス市で數十人を逮捕。
- ・ エジプトのマギド外相、ローマへ行き、フセイン国王と会見。

- デルアビブ市長、被占領地の非軍事化を提案。
 - パレスチナ人民の蜂起
 - 東エルサレムに、占領二年間初の外出禁止令。
一月二三日（土）
 - パレスチナ人民の蜂起
 - 右翼地区以外で、パレスチナ蜂起支持のゼネスト。呼びかけは、シリア、スンニの宗教リーダー。
 - テルアビブで、ピース・ナウが五万人の反占領デモ。八二年のレバノン侵略戦争反対、撤退要求デモ（最高時、四〇万動員）以来最大右翼がデモ隊に挑発し、つかみ合い。機動隊が介入。
 - イスラエル北部のナザレでは、一万人の反占領、反実力鎮圧政策デモ。この集会で、イスラエル唯一のパレスチナ人労働党議員が、脱党宣言。労働党の対外・国内政策に抗議。
 - 反イスラエル軍事闘争をしていたとして、PFLPメンバー容疑で八人が被占領地で逮捕された。
 - 被占領ゴラン高原で、蜂起連帯ゼネスト。
 - アラブ連盟緊急評議会、カダフィ大佐の要請で開催された。
 - シャミル首相、国際会議拒否に固

- ・執し、フセイン国王に、直接交渉に応えるよう呼びかけた。
- ・リクード連合ヘルート党幹部アミラン、パレスチナ人との政治的接触を禁じた内規違反で、処分された。
- ・西独外相、イスラエルへ。
- ・レバノンーシリア
- ・ベリ南部相、パレスチナ人—レバノン人の連帯を讃え、シリア軍のベイルート南郊への展開を歓迎。
- ・ジュンブラット、レバノン共産党書記長、モスクワ訪問。
- ガルフ戦争
- ・イラク北部で、北方司令官のヘリ墜落。
- ・チュニジア、エジプトとの国交再開。
- ・シリア外相、サウジ入り。

一月二四日(日)

- ・ペレスチナ人民の蜂起
- ・エルサレム、商店スト継続。
- ・ガザの七キャンプへの外出禁止令解除された。
- ・西独外相、イスラエルの占領政策に、遺憾の意を表明。
- ・ヨルダン国王、エジプト大統領からの秘密メッセージを持ってAJC(米ユダヤ人会議)代表が、シヤミル首相と会談(国際会議うけ

- マドリードで、一万人が連帯デモ
- PFLP、ヨルダンが三三人のパレスチナ人活動家を逮捕・弾圧したと、ヨルダンを非難。
- イスラエル南部から、ファタハがイスラエル北部へ潜入り、イスラエル軍と交戦。
- 米国務省政務次官アーマコスト、イスラエル訪問を二月一日からに確定。
- 南部のラシャディエ・キャンプの封鎖、解除された。
- チュニジア首相、ダマスカス訪問

ガルフ戦争

- ・ムバラク大統領歐州工作出発（西独訪問から）。国際会議新提案をもって、一月下旬から、訪米。
- ・米国務省筋によると、米帝はガルフ配備の米海軍艦船の削減（二月一八日前後）を決めた。

一月二六日（火）

パレスチナ人民の蜂起

- ・ガザのラファ・ジャバリエ両キャンプに、再び外出禁止令。
- ・駐ワシントン・エジプト大使、「現在の被占領地の状況は、エジプト・イスラエル双方にとって悪い。エジプト国内の過激派が、エジプト政府に大きな圧力をかけている」と語る。
- ・ハンナ・シンニオラ（エルサレム）、ファエズ・アブ・ラハメ（ガザ）が旅行禁止令解除され、訪米欧へ出発。シュルツ国務長官と会談した。
- ・コペンハーゲンで、連帯デモ。
- ・イスラエル機、サイダ上空を侵犯し、低空偵察飛行した。

- ・ラビン国防相、「投石・火炎弾では、イスラエルの政策変更は作れない」と語る。しかし、警官の犯罪行為、麻薬事件への関与、摘発、解雇が増大していると憂慮。
- 二月二日（火）**
 - パレスチナ人民の蜂起
 - 西岸のカルキリヤ町近くのハブラ村で、イスラエル軍が村人になぐりかかり、二〇人以上が負傷。
 - シオニスト極右のグーリー・エモニムが、自警団を作ったことを公表。昨夜は武装入植者がアイン・ヤブルド村とアナブタ村に侵入し、パレスチナ人の車等を焼きうちした。
 - 国連では、人権委員会で、被占領地のイスラエルの暴虐を討議開始。また、米帝は、安保理決議案（ジュネーブ憲章遵守要求）に拒否権を発動。
 - レバノン・シリア。
 - レバノン南部で、ハジビッラーが「S L A」拠点を攻撃した。
 - パレスチナ人民の蜂起

- ・シャミル首相、西岸のニリ入植村にヘリでのりこみ、記念植樹。
- ・西岸の全学校・大学閉鎖令。二五万人の学生、生徒が「暴力的なデモ」をやっているため。
- ・フェイイン国王、パリへ。シャミル特使のパリ入りが伝えられた。フェイイン国王は、「メッセージ、うけとつていいない」と否定。
- 二月四日（木）**
 - パレスチナ人民の蜂起

- ・イスラエル軍、昨日、西岸のトルクラム町で二十一歳の青年を射殺したと発表。また、二月九日に、ガザで射たれ、重態だったバドラン氏が、死亡。パレスチナ筋は、死者が少なくとも四七名になったとしている。
- ・シャミル首相、蜂起後初のガザ視察。
- ・東エルサレムの商業スト、二六日め。
- ・七日（日）に、蜂起二カ月記念の大衆的ストをうつよう、全パレスチナ市町村長への辞任を訴えたPLOのビラが西岸、ガザで地下でまかれた。
- ・西岸ヘブロン南のドゥラ、ラマッタ、アラ近くのシルワード等で、イスラ
- ・エル軍がデモ隊に発砲し、多數を負傷させた。
- ・シャミル首相、西岸のニリ入植村にヘリでのりこみ、記念植樹。
- ・西岸の全学校・大学閉鎖令。二五万人の学生、生徒が「暴力的なデモ」をやっているため。
- ・イスラエル北部への潜入闘争。パレスチナ・コマンドは、イスラエル兵二名をせん滅した。
- ・イスラエル北部へのカチューシャ・ロケット攻撃があつた。初めて、レバノン・パレスチナ合同コミュニケが出され、闘争責任を明らかにした。
- 二月五日（金）**
 - パレスチナ人民の蜂起

- ・西岸南部のヘブロン近郊で、右翼入植者が銃で武装してパトロールを開始した。
- 二月六日（土）**
 - パレスチナ人民の蜂起
- ・ロンドンで、三〇〇〇人のモスレムがパレスチナ蜂起連帯デモ。
- ・レバノン南部で、U N R W A職員二名が誘拐された。
- 二月七日（日）**
 - パレスチナ人民蜂起二カ月めを記念したゼネスト
 - ・西岸南部のヘブロン近くのベイト・オマル村で、イスラエル軍が、投石する青少年を銃撃。三人が殺された。ヘブロン周辺は武装入植者との緊張が高かった。
 - ・また、先週銃撃されて入院中の一人が、死亡。